

教育・学習の質向上に向けた新たな評価の在り方 ワーキンググループ（第 13 回）における議論について （令和 8 年 9 月 3 日）

○評価の段階について

- 社会から見た分かりやすさを考えると、学部と同じく 4 段階（要是正、★ 1、★ 2，★ 3）にすべきではないか
- 明らかな成果が出る前の、途中のプロセスを★ 2 として評価してあげることは、大学が取組を続けるインセンティブになる
- 海外と比較した際、日本の大学院は質を高めるべき部分もあり、そういった大学院に対し、国内の基準で安易に★ 3 を出してよいかは疑問が残る

○評価の基準について

- 修士、博士、専門職学位はそれぞれ別の評価とすべきではないか
- 特に修士課程は学部と近く、質保証の基準や視点についてはほぼ同じで良いのではないか
- 学部からの連続性という観点からも、質保証の基準や視点については揃えた方がよいように思う
- 大学院設置基準はアカデミアが主な出口となることを前提として作られたと思われるが、近年の博士人材像の拡大の中で質保証の観点に入るべきだが設置基準からははみ出ているもの（トランスファラブルスキルを身に付けさせる等）があると思料

○評価制度への組み込みについて

- Feasibility をどう見るかは慎重な検討が必要であるが、まずは学位審査等の出口管理に重点を置いた形で始め、様子を見ながらカリキュラム的な視点を追加していくということも一案ではないか